



TITLE:

<批評・紹介> 満州金石志稿 第一冊

AUTHOR(S):

秋貞, 實造

CITATION:

秋貞, 實造. <批評・紹介> 満州金石志稿 第一冊. 東洋史研究 1936, 1(6): 574-580

ISSUE DATE:

1936-08-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138711>

RIGHT:

滿洲金石志稿 第一冊

滿鐵調査資料第一六九編 昭和十一年四月二十日
 南滿洲鐵道株式會社發行 四六倍版二二一頁 寫
 眞二二葉

由來、滿洲史研究に於て常に啣たれる困難の一は、史料の不足關係文獻の乏闕にして、この限りに於て滿洲に遺存する金石文の資料的價值はより高く評價さるべきである。にも拘らず、之に關しては遼東志・熱河志・盛京通志・承德府志を始め、吉林外記・吉林通志・朝陽縣志等の府縣通志に地方部分的に記載收録されてゐる外、纔

かに金毓黻氏の遼東文獻徵略(卷八、民國十五年刊)卷三・四に十四・五の金石碑文を收めてゐるに過ぎない。而るに、滿洲國成立を一轉機として我が國並に在滿諸學者の間に要請され始めた滿洲蒙古史再考察の機運は、最近に於ける巴林蒙古よりの契丹諸帝后哀冊碑の出土、或は吉林省拉林河畔に於ける大金得勝陀頌碑の再發見その他數多の未詳碑文の確認と相俟つて、從來久しく交通不便による地利的障害、匪賊の出没による人命的危險の爲、難視されてゐた滿洲古今金石文の整理集成を必至ならしめることゝなつた。「滿洲金石志稿」は如上の困難を克服し學界多年の翹望を滿すべく編纂されたものにして、爾後我・人共にこの書の恩恵を蒙ること極めて多大なるべきを惟ひ、劈頭に於て吾人は編者園田一龜氏の獻身的努力と出版の衝に當られた滿鐵資料課に對して深甚の謝意を表さねばならない。

本書收むる所の金石文は、第一期高句麗・渤海時代(五)第二期遼時代(三三)第三期金時代(二三)第四期元時代(三六)總て九八を計へ——内、若干は一二年來既に編者が奉天滿鐵圖書館叢刊或は雜誌滿蒙に詳細なる解説を附して紹介を試みてゐる——各碑文毎に略解及び參考文

獻として廣く内外に亘る既出關係諸論文を添載し、研究者の便宜に供されてゐることは編者の學的良好性を強く感知せしめる。

第一期高勾驪・渤海時代

「母丘儉・丸都山紀功碑」(一)は後魏正始年間の建置とすれば、滿洲に現存する最古の碑石と見做すべく、「好太王陵碑」(二)は滿洲に於ける最大の古碑として名有り、(三)・(四)は錦州省義縣の萬佛洞内に存する北魏碑にして、後者「韓貞造像記」中に見える尉喻奚丹使云々の文字は從來尉喻奚丹使として知られたものであるが、實は尉喻奚丹使が正しいことは、昨夏五月吾人の親しく原地に赴いて拓出確認した所にして、本書にも之を的確にされてゐることは喜ばしい限りである。「鴻臚卿崔忻鑿井記」(五)は現在振天府に納められてその原石は容易に見得ず、拓本の流布又極めて稀である。

以上は滿洲に於ける五古碑とも稱すべく、(一)・(四)は後魏の對滿洲經略を窺ふ上に、(二)は高勾驪の半島經營、我が國との關係を研究する上に、(五)は唐と渤海國との交通路を迹付ける上に何れも有力貴重な資料を提供してゐる。

第二期 遼時代

滿洲事變以後の新獲墓誌碑碣が

多數收載され、就中、聖宗(十四)道宗(二十六)並にその諸后妃(十九・二十一・二十二)の哀冊文は契丹の極盛期に於ける他民族との關係を窺知せしめるもの多く、且つ之等と共に出土した四基(哀冊文二基 篆蓋二基)の契丹國書碑(添附寫眞參照)は從來未知の死語とされてゐた契丹文字の研究に豊富な資料を供するものとして内外學者の耳目を聳動してゐる。

その外「北安州興化縣令宋匡世墓誌銘」(十三)は熱河志以後の遼代興化縣否認説を覆へして、その實在を顯證し、「宣徽南院使韓椅墓誌銘」(十六)は極めて史料に乏しい遼と西域地方との交渉を闡明ならしめるに一の鍵キイを與へ、之等は韓椅の父韓瑜(八)或は相國賈師訓(二十四)の墓誌銘と共に内容的にも遼史を補訂する所多大なものがある。

「奉天・佛說佛頂尊勝陀羅尼經幢」(三十四)は奉天城内故宮前に現存し、俗に十面石唐開元三年石經幢として知られ、故内藤湖南博士の滿洲寫眞帳に紹介せられてより、夙に有名であるが、園田氏が精拓によつて唐開元三年の年は朝の誤讀なるべきを明かにし、且つ他のこの種の經

幢との比較により之を遼代ものと斷定したるは學界への大いなる功績と謂ふべきであらう。

第三期 金時代

「大金得勝陀頌碑」(五十)は昭和八年須佐嘉橘翁によつて、北滿拉林河畔なる石碑蔵子(吉林省扶餘縣)の原地に再發見されて以來、學界に喧傳されるに至つたが、この碑の高く評價される所以は碑陰に刻出された女眞文字を以ての故である。「上京寶勝寺前管内都僧錄寶嚴大師塔銘誌」(五十一)は嘗て明治四十二年白鳥博士によつて濱江省阿城縣白城に發見され、この地の金上京會寧府遺址なることを實證したものととして周く知られてゐる。「完顏婁室」(四十六)及び「完顏希尹」(四十七)の兩神道碑は金初史研究の根本史料として價值高く、後者に見出される遼靺及及び萌古斯に關する記載は遼金時代に於ける阻卜・蒙古・韃靼問題に一提唱を爲すものではあるまいか。

猶、第二・三期遼・金時代を通じて著しく目に著くのは佛教寺院關係のものが頗る多く、之等は夫々文獻稀有なる滿洲佛教史の研究者に缺ぐべからざる資料を供してゐることである。殊に(二十)(四十一)(四十五)(六十七)(六十八)(八十八)(九十三)(九十五)等は遼・金・元治下

の滿洲に於ける佛教の社會經濟史的考察をも可能ならしめ、かの遼朝佛教隆昌の物的基礎を爲した寺院所隸の二稅戶の究明にも一の手懸りを與へるであらう。

第四期 元時代

この期のものにあつては、先づ「張應瑞墓碑」(七十九)「竹溫台墓碑」(八十一)が推されねばならぬ。兩碑共、順帝の勅建にして、殊に碑陰の蒙文は——本志稿には收録されてゐないが——現存する蒙文(回鶻字系)碑中屈指のものにして、元代蒙古語研究上言語學的にも不可欠のものと謂ふべきである。

「懿州城南學田碑」(七十七)この碑の錦州省阜新縣(東八十里塔營子)現在は、この地が元代懿州城の故址なることを證する不動の史料にして、嘗て故箭内互博士が滿洲歷史地理第二(二七五頁)に於て精緻詳細なる考證の末、彰武縣城に比定されて以來衆説は多く之に左袒してゐるが、この碑によれば、彰武縣城説は餘りに北に偏在してゐることを了知しうであらう。「敦武校尉管軍上百戶張成墓碑」(九十一)この墓碑は「好太王陵碑」(二)と共に我が國との關係を知る上に貴重視さるべきである。

一般に金石の文字は自然的・人爲的に磨滅破損されたもの多く、その讀解に當つては實に異常の苦心と煩錯を

伴ふものにして、編者もこの點に深く意を致し、幾多の精拓良本を照合されてゐるやうであるが、然し猶、白玉の微瑕なしとしない。左に京都帝大東洋史研究室に蒐集されてゐる拓本と對校して吾人の増補し得た所を參考の爲表記して見よう。

一、母丘儉・丸都山紀功碑

行數 本志稿

(1) 宮。

三、萬佛堂・元景造像記

(7) 夷□濟難

(13) 祖然

(15) 帝住

(16) 諸眷□

(21) 建茲□窟

四、萬佛堂・韓貞造像記

(2) 達億

(5) 萬顏

逋石骨敬

(6) 冥造品物以享者也

斯是

京大拓

反。(宮は考へとしては面白いが原碑は明かに反である。)

夷且濟難

穆然

常住

諸眷屬

建茲淨窟

建(?)德(?)

萬類

隨方而?

眞造品物咸享物也

斯寔

(7)

與□大聖之師元貞

興衍尤聖之師光自

荊山

開山

眞客

眞容

劉都□□

劉都劉福

張惠楊凱胡堤

張惠福劉胡堤

□府□□之二途

趣府□之途

若□□之西連□私□

右□黎之西建造私窟

之□聖寶是以暉東微塵

是以暉聖容且表微溥之心耳

下及□□□

下及蜚虫不

尉喻使□

尉喻使令

隊主張惠□

隊主張惠福

猶、この摩崖碑の參考文獻としては濱田青陵博士「遼西義縣の石窟寺」(寶雲第八冊昭和八年十二月)松井等氏「契丹勃興史

(滿鮮地理歴史等があり、羽田博士も之が精細なる解説を試みられつゝありと洩れ聞く。

試みられつゝありと洩れ聞く。

十四、聖宗皇帝哀冊文

(7) 有司定識

有司定識

(20) 逢大陳

逢大陣

(29) 四海纏哀

四海纏哀

二十六、道宗皇帝哀冊文

(10) 倚敷

猗敷

三十八、遼中京址寺僧捐資碑

(1) 太傳

太傳演

施銅僧衣

施銅欄僧衣

(2) 僧智鐸

僧智鐸

(3) 億

憶

智詮守

智詮潘道三藏宋泉

(4) 息燃師

息燃師訓

(5) 運

運超運巖運濟運法印

(6) 賜紫

賜紫調誦大德

法詮德

法詮德恒法寂守

(7) 賜紫

賜紫金舊大德

(10) 祕

潘祕寶

(11) 大師

崇淨大師

(12) 大師

攝持大師

沙門德造

沙門德遠

(13) 知光院

知足院

三十九、靈峰院千佛洞碑

(1) 論事且

論事易

(4) 遂卜

遂卜築

(9) 非斫

非斫

(10) 狐疑

狐疑

(11) 盍

盍羞溫潤

(13) 連壁

連壁

(15) 嗣聲

嗣興

(16) 一念

一念心定

(18) この行のみ首行に刻されてゐる。

(20) 趙環

趙環

されてゐる。

四十七、貞憲王完顔希尹神道碑

(2) 大

中大夫

(5) 上閣門使

東上閣門使

騎都尉

上騎都尉

(9) 子小子

予小子

世選爾勞予…茲予大享

(11) 賢其贈

賢某贈

(16) 夷塹

夷塹

出家店

出河店

- (19) 天輔五年 烈 ☐ ☐ 取之
- (25) ☐ 其不備
- (26) ☐ 獲
- (30) 而。至
- (32) 淮陽
- 即。澶。漢。 ☐ ☐
- (43) 乃表。
- (44) ☐ 懼罪
- (47) 宗。僞。 ☐
- 移。匿
- (49) ☐ 內
- 還。車。中
- (52) 拔。劍。
- (54) 致。致。
- (57) ☐ 儒士
- 合。詞。至
- (61) 忠。貞。 ☐ ☐ ☐
- (71) 灼。命。王。孫
- 天輔三年 烈者。 ☐ ☐ 取之
- 掩。其。不。備
- 去。獲
- 所。至
- 睢。陽
- 取。澶。濮。大。名。
- 乃奏。
- 讒。懼。罪
- 宗。僞。代。
- 私。匿
- 門。內
- 還。軍。中
- 拔。劍。
- 致。致。
- 獲。儒。士
- 命。詞。臣。
- 忠。貞。至。王。則。
- 廼。命。王。孫

- この碑の解讀には最近發刊された北平研究院史學集刊第一期所收、徐炳昶氏の「校金完顏希尹神道碑書後」なる論文をも参照すべきである。
- 六十八、大寧路義州重修大奉國寺碑記
- (10) 森。淬。
- (11) 目。閃。
- 佈。懾
- (13) 佑。耶
- (19) 興。工。之。願
- 興。修。之。願
- 七十三、全寧路新建儒學記
- (5) ☐ ☐ ☐ ……
- 討 ☐ ☐ 郡。西。直。上。京。七。百。里。
- (8) 聖。人 ☐ 拱
- 聖。人。端。拱
- (27) 以 ☐ 志。
- 以。毋。忘。
- 七十六、大元同知徽政院事張氏先德之碑
- (1) 張。氏。
- 張。公。
- (6) 有。曰。
- 有。曰。
- (11) 汝 ☐ …… 勝。者。也
- 汝。官。…… 勝。者。也
- (13) 父 ☐
- 父。母。
- (15) 張。氏。分。謀
- 張。氏。家。謀
- (16) ☐ ☐ 對
- 王。啓。封

□日全寧

(18) □追討

□南江北

(22) 中奉大夫資善大夫

於□以濟大事

七十九、追封薊國公張應瑞墓碑

(5) 奉書勅篆

(16) 嶺北等行中書省

(26) 逃還

(27) 主嗣

八十一、中順大夫竹溫台墓碑

(13) 以滋

(21) 而意止

九十三、大奉國寺庄田記

(4) 所續耶

(6) 其祖

(8) 叢材

(9) 則曰

(11) 辨之

辨況

地。日全寧

尉追討

河。南江北

中奉大夫進資善大夫

於厄以濟大事

奉勅篆

嶺北等處行中書省

逃還

嗣主

以遂

而竟止

而續復耶

其租

叢林

則曰

與人

辯況

(16) 法春。

點。罰之當

(17) 是言也

法春。

點。罰之當

斯言也

既に本志稿の表題にも第一冊とある所よりすれば、編者には更に明・清時代のものをも續輯されることゝ信ぜられるが、その一日も早からんことを切望する。猶又、羅振玉氏にもこの種金石志編纂の企圖あるやに仄聞する。斯くして滿洲に關する金石碑文の整齊された曉、滿洲史の研究は更に一段の躍進を遂げるであらうことに吾人は輝かしい希望を感じる。(秋貞實造)

中國圖書館協會年會

中國博物館協會及び圖書館協會は青島山東大學と聯合して七月二十日より二十四日に互つて年會を催した。そのため故宮博物院長馬衡氏、北平圖書館長袁同禮氏等は青島に赴いた。同會において博物館協會側より發表される論文は次の如し。

清内務府與圖書藏圖考
清代檔案釋名發凡
軍機處及其檔案
清代紅本考
漢文老檔中之文字及史料
清代檔案分類問題

(大公報より)

劉官諤
單士元
張德澤
單士魁
李德啓
方廷生